



セビリアのシスター

コルドバ、グラナダなど八つの県からなるアンダルシア州の州都セビリアは人口約七十万人、スペイン第四の都市である。

世界遺産でもあるセビリアの大聖堂はスペイン最大、ゴシック様式としては世界最大の聖堂。

ここには以前、イスラム教のモスクが建てられていた。レコンキスタ（国土回復運動）でイスラムからセビリアを奪回したのは一二四八年。モスクは解体され、今の大



30年ぶりに再会したシスター

聖堂が建てられた。しかし、ミナレット（イスラムの尖塔）だけは残され、教会の鐘塔となった。高さ九十八メートルのヒラルダの塔の上には、「信仰の勝利」を象徴する女性像があり、この像が風で向きを変えることから、ヒラルダ（風見鶏）の名がつけられたという。コロンブスはセビリアの港を出てアメリカ大陸を発見した。このため、彼の棺が大聖堂の中にある。またセビリアはオペラ「カルメン」「ドン・ファン」などの舞台としても知られ、一九九二年の万国博覧会で知名度をさらに高めた。さて、南スペイン巡礼の目的の一つは、セビリアの観想修道会にいる日本人シスターに会うことである。彼女とは三十年ばかり前、教会の集いで初めて出会った。

当時はアルゼンチン大使館に勤めていて、スペイン語が話せる魅力的な才女であった。それから数年後、彼女は山口市仁保にある観想修道会・女子カルメル会に入会した。お姉さんもそのシスターである。入会后、六年目に開かれる荘厳誓願式には私も出席させてもらった。バラの花で作られた十字架の上うつぶせになり、生涯、神への奉獻生活を送る誓願を立てる姿に心の底から感動した。しばらくして彼女がセビリアのカルメル会に転籍したことを知った。お姉さんとも離れ、自分に厳しくしてより神に近づいたため、ただ一人、外国の観想修道会に移ったのだろう。南スペインに行く際は彼女を訪ねたいと考えていた。

世俗を離れ、沈黙の中で祈りと労働の生活を続ける観想修道会の規律は厳しい。面会時間も限られている。山口のカルメル会から何度かFAXで連絡を取ってもらい、やっと面会が実現したのである。セビリアのカルメル会は大聖堂のすぐ近くにあって、非常に古い建物で、面会室は雨漏りのため修理中。臨時の面会室は、面会者との間が鉄格子ではなく、木の格子で仕切られていた。彼女の目は輝き、喜

びにあふれていた。充実した奉獻生活を過ごしていることが伝わってくる。持参した土産の菓子などには一つ一つ子どものように喜ばれた。十八人の共同体で日本人は彼女一人。人にはいろいろな生き方がある。しかし、本当の人間の輝きは神への賛美と感謝の中から生まれてくると実感した。詩編の言葉「主を仰ぎ見て、光を受けよう。主が訪れる人に顔は輝く。」（元山口放送取締役ラジオ局長）



町のどこからも見えるヒラルダの塔